

日本最北の城下町に残る

松前藩ゆかりの古刹を訪ねて

日本最北の城下町、松前町。その繁栄は「松前の春は江戸にもない」と言わしめるほどであったが、やがて幕末の動乱期、新政府側についた松前藩は旧幕府軍の攻撃によって落城、町の三分の二を焼失した。そして、城下の寺もまた焼き払われた。しかし、寺町にいまも残る藩とゆかりの深い古刹は、史跡・文化財としても貴重な存在となっている。

1



- 1 法幢寺山門 戦禍を免れ、天保9年(1833年)当時のままの姿を留める。左右に四天王を配した四天王門
- 2 向かって右側の四天王
- 3 手入れの行き届いた法幢寺の境内。本堂は箱館戦争での焼失後に再建された



若狭(福井県)から渡った二人の僧侶が伝道

松前家の祖は、若狭(福井県)の武田家の血を引く武田信広に始まる。その信広の縁者と言われる若狭の僧、伝心随芳和尚が文明元年(一四六九年)、奥尻島に草庵を結んだのが北海道内での曹洞宗の起りといわれる。



取材にご協力をいただいた法幢寺三十一世木村清韶住職(右)と副住職の木村清憲師

この草庵が法源寺の開創でもあり、奥尻島から上ノ国を経て大館へと移り、延徳二年(一四九〇年)、松前の地に築かれた。道内に曹洞宗を開いたもう一人の僧が、同じく若狭神通寺の天室宗源和尚である。文明二年(一四七〇年)、松前大館に法幢寺を建立するが、戦禍によって焼失。天文十五年(一五四六年)、現在の地に再建された。江戸時代には法源・法幢両寺に末寺が開かれ、法幢寺は触頭に任ぜられるなど、藩と係わりの深い寺として、ともに繁栄を極めた。

法幢寺は焼失後、蠣崎家三代義広と四代季広の二代にわたる尽力によって再建、松前藩の成立にともない、松前藩主の菩提寺となった。境内裏手には歴代藩主とその室や子を祀る「松前藩主松前家墓所」もあり、五十五基の墓碑がひっそりと並ぶ。

一方、法源寺は初代武田信広と二代蠣崎光広の菩提寺であり、いずれの寺も藩とゆかりの深い古刹として永い歴史を歩み続ける。



5



4



8



7



6

- 4 法源寺山門 江戸時代中期のものと思われる四脚門で、道内最古の山門と言われる(国指定文化財)
- 5 法源氏山門から本堂へと続く境内の参道
- 6 「双竜の滝」が流れる法幢寺の庭園。松前城への導水路を兼ねて造られた
- 7 惣門越しに眺める龍雲院の境内。松前で唯一戦禍を免れた最古の寺
- 8 龍雲院本堂の彫刻 戦禍を免れた本堂に残る欄間彫刻(本堂を含む五棟の伽藍が国重要文化財指定)

寺男の機転で 焼けずに残った最古の寺

もう一カ寺、松前の古刹の中でも創建(改築)当時の姿をほぼそのままに留めているのが龍雲院である。公家から興入れされた、七代公広の正室桂子夫人が、長男の栄達を祈って建立したもので、山号・寺号は桂子夫人と長男の戒名に由来している。建立は寛永二年(一六二五年)。本堂と庫裏は天保十三年(一八四二年)に建て替えられたが、戦禍を唯一免れたこの寺は、松前に残る寺院の中でも最も古いものとされている。箱館戦争(戊辰戦争)で多くの寺が焼き払われた中、この寺だけが焼けずに残ったのは、寺男の機転によって難を逃れたからだと言えられる。



10



9

- 9 緻密な彫刻が残る龍雲院惣門の扉(国重要文化財指定)
- 10 龍雲院の鐘楼(国重要文化財指定)



13



11

- 11 松前家御霊屋 戦禍を免れた貴重な仏堂。室内には歴代藩主の位牌が祀られている(法幢寺)
- 12 松前藩主松前家墓所 19代にわたる歴代藩主とその室、子などを祀る55基の墓碑が静かに並ぶ
- 13 松前家墓所へと続く参道。竹林が茂る趣のある風景



12

「無高の藩でありながら 繁栄を誇った往時を偲ぶ」

日本最北の藩である松前藩。米が取れなかったために「無高の藩」と呼ばれたが、蝦夷地の産物を一手に掌握し、「松前の春は江戸にもない」と言われるほどの繁栄を遂げた。北前船の交易によって上方文化も浸透し、幕府からは北方警備の任を賜るまでに至ったが、幕末動乱期の度重なる戦禍によって町は焼失。多くの寺もまた、藩士によって焼き払われてしまった。現在の伽藍は、その後再建されたものがほとんどだが、焼失を



14 松前家御霊屋内の天井に描かれた花鳥画(法幢寺)
15 法源寺経堂の欄間に施された竜の彫刻

免れた山門の造形美や装飾の見事な技に歴史の重みがかがえる。
繁栄の中心は、その後函館や札幌へと移っていくが、史跡・文化財がいまも残る城下の風情や、参道の大樹一本にさえ、往時を偲ぶ歴史の息吹が感じられる。春の桜は有名だが、秋の景色もなかなか美しい。

歴史と文化が薫る城下町

天守閣を誇る日本最後の城

松前城

日本最北の藩、松前藩。その居城であった松前城は、天守閣を誇る城としては日本で最後に建てられたものである。安政元年(一八五四年)、十七世松前崇広によって築城され、北方警備の必要を幕府に命じられての備えであった。設計は兵学者の市川一学。

しかし、この城は箱館戦争(戊辰戦争)で、新撰組副長の土方歳三率いる旧幕府軍の攻撃によってあつげなく落城した。その時の砲弾のあとがいまも石垣に残されている。

その後、明治四年(一八七



重要文化財指定の本丸御門(手前)と鉄筋コンクリート造で再建された天守閣



本丸表御殿玄関(道有形文化財指定)の欄間彫刻

● 開館時間：9時～17時(4月～12月)
● 入館料：大人 350円・小人 230円

年)の廃藩置県の施行によって城は明治政府のものとなり、天守と本丸施設以外の建物は取り壊された。昭和十六年(一九四一年)、天守と本丸御門、本丸御門東塀が当時の国宝に指定されたが、昭和二十四年(一九四九年)松前町役場からの出火が飛び火し、天守と本丸御門東塀は焼失してしまった。

再建された天守は、現在松前城資料館として公開されている。なお、本丸御門は重要文化財、本丸表御殿玄関は北海道有形文化財指定。

城下の繁栄を再現したテーマパーク

松前藩屋敷

「松前の春は江戸にもない」と言われるほどの繁栄を謳歌した松前城下。幕末には三万人の人が暮らしたという城下町の賑わいを再現したテーマパークが「松前藩屋敷」だ。

ここに再現された建物は十四棟。蝦夷地に出入りするあらゆる物や人から税を徴収したという海の関所「沖の口奉行所」や、北前船の交易で財を築いた「商家」、藩士の屋敷を再現した「武家屋敷」などなど、まるで江戸時代にタイムスリップしたかのようなリアルな世界が体感できる。

武家屋敷などは、靴を脱いで屋敷内までも見学することができ、当時の暮らしが垣間見えて楽しめる。また、「廻船問屋土蔵」には実際の北前船を十分の一に縮小したレプリカも展示されている。



「廻船問屋土蔵」に展示された北前船のレプリカ

道内では松前にしかない白花タンポポ



北前船の交易で莫大な財を築いた実在の商家「近江屋」を再現



● 開館時間：9時～17時(4月上旬～11月上旬)
● 入館料：大人 350円・小人 230円